

豊郷中央小学校「哲学対話」 実施報告

テーマ：お手伝いは必要か

開催日：2018年7月2日（月）

開催内容：

宇都宮市立豊郷中央小学校（栃木県宇都宮市）にて、豊郷中央小学校の地域連絡協議会・放課後子どもクラブと共同で「哲学対話」を開催しました。

今回は、4年生と5年生の児童計18人が参加し、2月に開催した「なぜ学校に通わなくてはいけないのか」というテーマに続き、子どもにとって身近なことの1つである「お手伝いは必要か」というテーマで対話を行いました。

「お手伝いをする人はいるか」という質問に全ての児童が挙手をし、「どのようなお手伝いをしているか」という質問に対しては、風呂掃除、食器洗い、米とぎ、洗濯物干し、布団たたみ、洋服たたみ、くつ洗い、くつ並べ、部屋の片づけ、おつかい、犬の散歩、魚のエサやり、庭の水やり、草むしり、コーヒー淹れ、きょうだいの世話、回覧板を届ける、手紙の投函、新聞の回収、キャンプでのテント張りなどたくさんの方があがりました。

お手伝いをする理由は、全員が「当たり前のこと」という認識をもっており、母がたいへんそうだから手伝う、綺麗になるとみんなが喜ぶから手伝うといった自分以外の誰かが助かる・喜ぶ、あるいは自分も気持ちよく過ごせるという点が大事なようでした。

児童たちがあげたお手伝いの内容は、今すぐやらなくとも困らないことばかりです。実行が遅いと怒られることもありますが、促されるまで行う必要性を感じません。また、母親からしたら、どちらも自分で行った方が早く片づき、例えば、食器などを子供が割ってしまったらさらに仕事が増えてしまうのに、どうして子どもにお手伝いをしてもらうのでしょうか。

ある児童は、母は働いているので疲れているから手伝うという意見を述べました。しかし、児童たちの父親や母親は働いて疲れています。児童たちも学校や遊びで同じように疲れているはず。家族全員が疲れているならば、買い物は宅配を利用したり、掃除は掃除ロボット、風呂洗いは自動洗浄に任せれば児童たちがお手伝いをする必要はありません。実際、祖母の家は全部宅配や掃除ロボットなどを使っていると発言した児童もいました。

それらの発言をきっかけに、大人の仕事は学校よりも大変だと思うので手伝う、親は家族のために仕事をしているのでそのお返しがお手伝いだと思う、庭に綺麗な花が咲いたら家族が喜ぶから手伝う、家族が喜んでくれるようなお手伝いをするにはロボットには無理だと思うなど、小学生らしい感性とさまざまな視点からの意見があがりました。また、全てをロボットや他人に任せると費用がかかるという鋭い発言もありました。一方で、自分が一人暮らしをしたときに困らないようにするため、家族が亡くな

ったら自分でやらなくてはいけないからなど、自分のために今から生活にかかわる技を身につけておくことが重要だとする意見も出ました。

しかし、お手伝いは人や家族を助けるための行動であるという認識であるのに、「自分のため」にしていることはたしてお手伝いと言えるのかという疑問がわきあがりました。お手伝いは人のためにすることなのか、それとも、自分のためにすることなのでしょうか。

全てをロボットや他人に任せると費用がかかるという発言がありましたが、家族が手伝えば無料だからお手伝いをするのでしょうか。しかし、実際のところ、多くの児童はお手伝いをする際にお小遣いをもらっていました。そのことを認識すると、児童たちは何かおかしいと思い始めました。

お手伝いは人のためにするという認識であるのに、お金をもらったらそれは働くことであり、つまりアルバイトではないのでしょうか。当初話題になっていた、お手伝いの根本的な「人のため」という点が、いつのまにか抜けていることに気がつきました。「人のためにやっている」と思っていたことが、実は「自分」のためであったり、対価や報酬のために行っていたりと、お手伝いの本質が変わっていることに全員が驚きました。さらに対話を進めていくと、「お金をもらえるお手伝い」と「お金をもらえないお手伝い」があること、「毎日やるお手伝い」と「時々やるお手伝い」があることが明らかになりました。

さまざまな意見が飛び交い、このテーマを巡って発言が何周もした後、児童たちの意見を「好きなこと」と「嫌いなこと」という縦軸と、「自分のこと」と「他人のこと」という横軸から構成される表にまとめていきました。子どもたちが考える「お手伝い」の多くは「好きなこと」で、かつ「他人のこと」に分類されていきます。一方で、他人のためにやることで、かつ嫌なことには、「お金をもらうお手伝い」が分類されました。

豊郷中央小学校の児童たちは、父親や母親の日々の姿をよく見ていて、両親が子どものため、家族のためにたくさん働いて帰宅することをよく知っていました。そして、お小遣いをもらいながらもさまざまなお手伝いをしており、それを楽しそうに話してくれたこと、お手伝いに対して誰も不満に思っていなかったことが印象的でした。そして、「普段は当たり前だと思っていたことが、実はそうではないかもしれないと考えることが哲学だと思う」という児童の発言がたいへん印象に残りました。

今後も、このような「普段は考えないことについて、初めからじっくり考える」という哲学対話の場を、さらに広げていきたいと考えています。

